



ICHIKAWA LIBRARY

参考業務月報

2024 年 12 ・ 2025 年 1 月号

発行：市川市中央図書館 編集：レファレンスカウンター 〒272-0015 市川市鬼高1-1-4 TEL. 047-320-3346

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
12月	635	355	440	23	1	1,454	644	65	171	230	69	454	3,087
1月	680	401	454	9	5	1,549	707	43	167	236	88	560	3,350
累計	8,032	4,421	4,959	532	41	17,985	7,357	551	1,657	2,349	767	5,168	35,834

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

📖 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

Z/ナ 永井荷風の身長を知りたい。市川市役所庁舎の等身大パネルは大きすぎないか。

『荷風ノ散歩道』（市立市川歴史博物館 1990）p.30 の写真キャプションに「荷風は身長 180cm、足の大きさ約 27cm、帽子のサイズ 56cm だった。」とある。『永井荷風：「断腸亭日乗」と「遺品」でたどる 365 日』（市川市文学ミュージアム 2013）p.23 に「荷風は身長 180cm…」と同様の記載があり、「荷風の和服寸法」の写真には、「身丈（身ごろの長さで肩山から裾までの丈のこと）が 3 尺 8 寸 5 分（約 145cm）あり長身だったことがわかる。」とのキャプションもあった。ただし、『着物の事典：伝統を知り、今様に着る 改訂版』（大久保信子／監修 池田書店 2023）p.229 より「身丈とは、着物の身頃の長さのことで、だいたい身長と同じくらいと思って間違いありません。」とあるように、身丈から長身というには疑問が残る。

一方、『永井荷風の東京空間』（松本哉／著 河出書房新社 1992）の p.106～109「荷風さんの身長」では、著者が現存する門の寸法を計測し、荷風の身長を割り出した過程が記載されており、p.108 に「165 センチといったところではないでしょうか。」とある。また、同著者の『荷風極楽』（三省堂 1998）では、p.178～185「身長のことなど」で、和服の寸法（前述の身丈）から身長を推察し、p.181 に「やはり荷風の身長は一六五センチくらいが妥当なところではないかと思えてくる。」と記載されていた。

I/C2 市川市に「^{どうめ}道免き^{やつ}谷津」という地名があったが、「^{どうめ}どうめき」の由来を知りたい。

旧国分村の大字「国分」に「道免き谷津」という小字があった。『角川日本地名大辞典 12 千葉県』（「角川日本地名大辞典」編纂委員会／編 角川書店 1984）には「道免き」の掲載なし。『地名用語語源辞典』（楠原佑介、溝手理太郎／編 東京堂出版 1983）p.443 より「^{どうめ}道目、^{どうめ}道免」の②項に「^{どうめ}ドウメキと同じか→^{どうめ}どうめき。」とあり、「^{どうめ}どうめき〔^{どうめ}道目木、^{どうめ}泥目木、^{どうめ}百目木…〕」の説明として、「水音の響きにちなむ地名。トドメクと同源。もとは擬音ドウドウによるか。」との掲載があった。また、『日本地名語源事典』（吉田茂樹／著 新人物往来社 1981）p.322 にも「^{どうめ}ドウメキ」の項があり、「全国的に分布するが、東日本に多く見られる地名。「トドメキ（轟めき）」の転化で、川音の騒ぐ地点の地名。」とある。他に、青空文庫（電子テキスト）『地名の研究』（柳田国男／著）（https://www.aozora.gr.jp/cards/001566/files/58544_68749.html 2025.3.25 確認）の「地名の話 二」に「^{どうめ}ドウメキ、^{どうめ}ザワメキ、^{どうめ}ガラメキなどはもと水の音を形容した地名であるが、瀬の早い川の岸にある部落または田畑で^{どうめ}百目木、^{どうめ}沢目鬼などという例はいくらもある。」との掲載もあった。こちらは『地名の研究』（柳田国男／著 中央公論新社 2017）p.22 にも掲載あり。

314.8 選挙の当確報道について記載された資料を見たい。

『教えて南部先生!18歳までに知っておきたい選挙・国民投票 Q&A』(南部義典／著 シーアンドアール研究所 2023) p.114～117「Q22 開票が始まる前に「当選確実」が出るのはどうして？」の中で、「各社が「当確打ち」のスピードを競う理由」に「メディア界の慣例ですが、一番初めに「当選確実」を打った報道機関に、当選を果たした候補者にインタビューを行う権利が与えられるからです。」との記載あり。『図解国会の楽しい見方 新訂版』(時事通信社政治部／監修 東京書籍 2018) p.252～254「62 なぜ開票が終わらないのに「当選確実」が出るの？」や『世論調査とは何だろうか』(岩本裕／著 岩波書店 2015) p.55～90「第2章 選挙が世論調査を発展させた」の中で「出口調査」について「NHKは1993年の衆議院選挙からこの方法を全国的に導入し、これがその後の選挙報道を大きく変えたと言われています。」との記載あり。

699.1 倉本聰の『破れ星、燃えた』(幻冬舎 2023) p.51 に「当時の郵政省はテレビ局に対し、放送を終えたテープというものを消却すべしと通達を出したらしい。」とあるが、この記述の事実確認をしたい。

通達について『基本行政通知処理基準』(ぎょうせい 加除式)や「官報情報検索サービス」、「e-Govの所管法令・告示・通達」というインターネットサイトで調査したが、該当なし。また、千葉県立図書館に調査依頼したところ、データベースD1-Law.comの「現行法規(通知通達検索)」でも該当がなく、『放送六法 平成元年版』(郵政省放送行政局企画課／編 ぎょうせい 1989)、『放送法逐条解説』(金澤薫／著 電気通信振興会 2006)にも掲載なしとの回答だった。

テープの消去については、『破れ星、燃えた』のp.51～52に「「赤ひげ」も「文五」も「2丁目3番地」もごくごく一部を除いては、この世に今存在していないのである。」とあり、「赤ひげ」は1972年のNHKテレビドラマ、「2丁目3番地」は1971年の日本テレビ系列テレビドラマということから、1970年前後の状況について改めて調査したところ、千葉県立図書館より『TBS50年史』(東京放送 2002) p.122に「*58年5月29日、アンペックス社製2インチ4ヘッドVTR(VR-1000型)を2式購入した。(中略)テープは30分ものが10万円と極めて高価なため、当初は30分テープ7本、1時間テープ3本で運用した。(*1958年)と、テープが高価なため繰り返し使用していたことがわかった。その他、インターネットで確認したところ、NHKのNHKアーカイブス「NHK番組発掘プロジェクト」の「発掘ってなに？」(<https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=C0110043> 2025.4.13 確認)に「テレビ放送初期の頃はもちろん、その後もほとんどの番組は、放送されたらお役御免。保存される番組は限られていました。」「テレビ放送が始まった1953年(昭和28年)から1970年代までは多くの番組が残されていないのです。」「実は放送用ビデオテープが非常に高価で、何度も上書きして使いまわしていたためなのです。当時、輸入品でしかなかった放送用の2インチテープ(テープの幅が2インチ：約6センチ)は1本100万円ほど。当時、高級車1台が買えるほどの値段でした。」との記載があった。

他にもこんな質問ありました(クイック・レファレンスから)

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など
289.1	幕末久保田藩最後の藩主「佐竹義堯」について知りたい⇒『最後の藩主：佐竹義堯』(土居輝雄／著 東洋書院 加賀谷書店(発売)2000)。久保田藩(秋田藩)については、『秋田藩(シリーズ藩物語)』(渡辺英夫／著 現代書館 2019)や『新編物語藩史 第1巻 北海道・東北地方の諸藩』(榎森進／[ほか著] 新人物往来社 1975) p.129～171「秋田藩」などに掲載あり。	
756.6	千子村正について説明されている本はないか⇒『日本刀名工伝』(福永酔剣／著 雄山閣出版 1996) p.93～132に「千子村正」の章がある。他に『日本刀工刀銘大鑑』(飯田一雄／著 淡交社 2016) p.682「村正[むらまさ] 初代」の項に、「右衛門尉。千子と号す。」とある。	
914.6	向田邦子のエッセイ「学生アイス」が読みたい⇒NDLサーチより『父の詫び状』(向田邦子／著 文藝春秋 2006) p.170～181所収。	
933	ヘミングウェイの短編「Cat in the Rain」の原文が読みたい⇒『Complete Short Stories of Ernest Hemingway』(Hemingway, Ernest/A Scribner 1998) p.129～131所収。	